

誰かの痕跡を「光」として山に見る

アートの現場から

ACCAC通信

国際芸術センター青森（ACCAC）では、公募と海外連携AIR（アーティスト・イン・レジデンス）上美樹さんの活動についてご紹介します。

村上さんは、自分自身や他者の個人的な経験や記憶に焦点を当て、それらの忘却や愛着のある物を廃棄することへの抵抗感を作品制作に取り入れているアーティストです。作品展示も単なる物の配置ではなく、鑑賞者と作品の相互作用が起きます。海外を拠点とする場として考え、人間の体験が拡張される「記憶の場」として空間を作り上げています。

10月になって県外からのアーティストの滞在制作も再開し、現在3人のアーティストがそれぞれのプランに基づき、滞在制作を進めています。海外を拠点とする場として考え、人間の体験が拡張される「記憶の場」として空間を作り上げています。



イザベラ・バード記念標と村上美樹さん

だった登山を通して気づいたこと、感じたことを、小説や野外彫刻・指標など他者の痕跡とも重ね合わせながら、レクチャーパフォーマンス《光が痕跡となつて、山にとまる》として、約1時間の講演とも上演とも言える作品にまとめようとしています。

八甲田山、岩木山、恐山連峰、縫道石山、矢立峠、十和田湖など、3週間にも満たない短い間に何度も山に出かけ、自分で地図を読み解き登山ルートを確定、体力とも相談しつつ疲れすぎないように調整を繰り返してきた村上さん。例えば、青森と秋田の県境になって

いる羽州街道矢立峠は津輕藩の歴代藩主、伊能忠敬、吉田松陰が歩き、明治天皇も訪れた「歴史の道」です。村上さんは、19世紀イギリスの旅行家イザベラ・バードが矢立峠を絶賛していることを踏まえてこの道を歩き、百年以上経過し様変わりしている風景のなかでも、バードが何に心惹かれたのか、その景色の断片を捉えることができたようです。また、山道には多くの「クマ出没注意」看板がありますが、中には熊などによって傷付いたのではないかと思われるサインや標が

多くなり、彼女の痕跡探しは大自然の中で人間だけではない生き物や自然にも拡大しています。

村上美樹さんのレクチャーパフォーマンスは11月6日（土）午後2時半から本番を行う予定です。その後、アーカイブ展示として展示棟AVルームでも本番の様子を追体験できます。AIRの成果が展覧会としてご覧いただけるのは、11月13日（土）からの予定です。複雑なプログラムですが、各アーティストの活動の進展を含んでお楽しみいただければと思います。最新情報は、当館ホームページをご覧ください。

（青森公立大学国際芸術センター）青森学芸員 慶野結香

※第1金曜日掲載